

小学校低学年児童の文章表現力について

— 小西純一郎君の「日記」を中心に(2)—

国語科教育教室 菅 原 稔

はじめに

小西純一郎君（昭和28年〈1953年〉4月24日、兵庫県氷上郡生まれ）は、小学校入学直前（昭和35年〈1970年〉3月20日）から日記を書きはじめ、3年生の11月（昭和37年〈1962年〉11月10日）までに、107冊もの日記帳に、計648編の文章を書いている。

これらの文章のうち、1年生の終わりまでに書かれた51冊の314編については、すでに考察し、1年生児童の1年間にわたる日記の文章表現力について、次のような点を指摘した⁽¹⁾

1. 純一郎君の日記においても、比較資料として取り上げた広島県教育研究所の調査においても、題材（素材）は、遊び、お手伝い、家庭、学校など、身近な生活範囲からとられている。
2. “社会”に関する題材は、遊び・お手伝い・家庭・学校等を取り上げ、行動を描写することができるようになって後に、観察を中心にして取り上げられる。
早い時期に“社会”に関する題材（素材）を取り上げた文章は、行動の描写と観察の描写が混乱し、ねじれたものとなる傾向がある。
3. 構想は、ら列的・表出的なものから、興味・関心を中心としたものに移行する。
また、そのほとんどが、行動や事件・出来事を時間的経過にしたがって書きつけたものである。
4. 文字量・文数等には、大きな個人差がみられる。とくに日記文のばあい、文字量・文数等は、取り上げられる題材（素材）による差が大きく、学年内の増加傾向はみられない。
5. 句読点・拗音・促音等の誤用は、徐々に減少していくが、話しことばの音声をそのまま文字化する誤った表記は、減少しない。
6. 描写力・表現力は、㉞行動→㉟観察→㊱思考・感情と発達（変化）していく。1年生の段階では、観察に思考・感情が加わった、㉟から㊱へ移行する時期のものに優れた文章が多くみられる。
7. 観察を中心とした描写力・表現力は、大ざっぱな観察による一般的観念的な記述の段階から、こまかな観察による具体的・客観的な記述の段階へ、さらには、観察による記述が作者の思考・感情をあらわすものとなり、記述の具体化・客観化が思考・感情の具体化・客観化ともなる段階へ、と発達する。
8. 1年生の描写力・表現力は不安定なものであり、題材（素材）に対する興味・関心の差が、観察力（→描写力）の差となってあらわれる。

本稿では、上の考察をふまえ、2・3年生の間に書かれた日記(56冊334編)によって、⁽²⁾そこにみられる文章表現力のありようを、明らかにしたい。

いま、2・3年生の間に書かれた日記の題目を、書かれた順にあげると、次のようになる。(各日記の通し番号は引用者において付したものである。)

(月・日) (題 目) (文数, 文字数)	
1	4・1 しがつばか (11, 352)
2	4・2 さんぱつ (17, 470)
3	4・3 さんぱつ (35, 964)
4	4・4 しょうちゃんがさんだいった (34, 904)
5	4・5 きんぬき (19, 388)
6	4・6 しょうぎ (12, 397)
7	4・7 さんだからかえった (9, 274)
8	4・8 かわらすずめ (11, 378)
9	4・10 きょうしつをまちがえた (8, 269)
10	4・11 くさひき (10, 443)
11	4・12 うちやい (16, 534)
12	4・13 えんそく (12, 294)
13	4・14 せっけんのあわ (4, 95)
14	4・15 はいぶとり (21, 503)
15	4・16 つくえ (19, 587)
16	4・17 おかあちゃんがきてなかった (9, 210)
17	4・18 きゅうこん (19, 678)
18	4・19 くつとばし (11, 255)
19	4・20 つくし (9, 304)
20	4・21 てれび (23, 617)
21	4・4 ゆうびんごっこ (21, 506)
22	4・23 きんま (11, 261)
23	4・24 ふろもやし (14, 329)
24	4・25 たいいく (18, 457)
25	4・26 さしとくれいいうといて (15, 477)
26	4・27 つくえ (12, 444)
27	4・28 あさがおのたねうえた (11, 367)
28	4・29 くるまおし (13, 540)
29	4・30 ひとみちゃんのぼーる (15, 440)
30	5・1 かていほうもん (12, 408)
31	5・2 まんじょう (13, 364)
32	5・3 おおそうじ (8, 265)
33	5・4 てうちやきゅう (28, 689)
34	5・5 ひよこ (15, 394)
35	5・6 かくれんぼ (17, 555)
36	5・7 くやしい (16, 511)
37	5・8 ゆうだち (17, 456)
38	5・9 ツベルクリン (11, 364)
39	5・10 さかなつり (13, 364)
40	5・11 ちゅうしゃ (17, 416)
41	5・12 おじいちゃん (5, 176)
42	5・13 ちょうちょ (9, 365)
43	5・14 テープレコード (22, 528)
44	5・15 すもう (19, 462)
45	5・16 かくれんぼ (26, 682)
46	5・17 へび (14, 401)
47	5・18 すもう (11, 327)
48	5・19 みずのえみずのと (17, 471)
49	5・20 むかいにいった (26, 645)
50	5・23 じんましん (33, 850)
51	5・24 くるまにのせてもらった (27, 666)
52	5・25 うしおい (8, 339)
53	5・26 はらいたぐすり (12, 490)
54	5・27 むぎはこび (32, 877)
55	5・28 かおつけやい (32, 696)
56	5・29 足くくってほどきやい (27, 637)
57	5・30 じえいたい (36, 943)
58	6・1 田んぼへいった (16, 387)

- 59 6・2 なえにき (16, 490) (14, 423)
- 60 6・3 あおむし (19, 510)
- 61 6・4 なえひき (34, 862)
- 62 6・5 ひる (12, 324)
- 63 6・6 みずぐるま (24, 680)
- 64 6・7 じょうりかくし (38, 917)
- 65 6・8 ほたるとり (16, 441)
- 66 6・9 にげてあそんだ (22, 651)
- 67 6・10 うしにのせてもろた (13, 296)
- 68 6・11 なたねふみ (17, 412)
- 69 6・12 ほたるとり (24, 587)
- 70 6・13 みずぐるまがでしなかつた
(16, 362)
- 71 6・14 こくごのじかん (22, 663)
- 72 6・15 へび (13, 290)
- 73 6・16 だっこつき (14, 412)
- 74 6・17 ありのたまご (14, 317)
- 75 6・25 せみ (8, 173)
- 76 6・26 どうとくのじかん (17, 393)
- 77 6・27 あめふり (17, 424)
- 78 6・28 ひよこがしんだ (19, 434)
- 79 6・29 すもう (16, 361)
- 80 6・30 ずがのじかん (12, 288)
- 81 7・1 ふねをつくつた (14, 316)
- 82 7・2 けが (9, 232)
- 83 7・3 おきるけいこ (11, 300)
- 84 7・4 てうちやきゅう (22, 446)
- 85 7・5 おかあちゃん (15, 405)
- 86 7・6 おかあちゃんのうそつき
(7, 171)
- 87 7・7 くわがた (12, 211)
- 88 7・8 せみとり (14, 338)
- 89 7・9 くりからへいかなかつた
(19, 554)
- 90 7・10 おとうちゃんがおこつちやつた
(7, 223)
- 91 7・11 ウォーションウエーブ
(9, 211)
- 92 7・12 ずが (14, 396)
- 93 7・13 こくばんにえをかいた
- 94 7・14 じしゅう (18, 511)
- 95 7・15 すもう (10, 189)
- 96 7・16 いねせき (20, 437)
- 97 7・17 しょうちゃんのべんとう
(12, 296)
- 98 7・18 川でおよいだ (22, 500)
- 99 7・19 すみやきごやえいつた
(21, 649)
- 100 7・20 うそいうちやつた (29, 777)
- 101 7・21 川でおよいだ (11, 331)
- 102 7・22 ながさきへいきたい (7, 301)
- 103 7・23 とれなかつたおにむしとり
(7, 223)
- 104 7・24 むし (11, 376)
- 105 7・25 つうしんぼ (19, 408)
- 106 7・26 くも (10, 247)
- 107 7・27 うし (12, 282)
- 108 7・28 せみとり (5, 251)
- 109 7・29 すいか (12, 247)
- 110 7・30 きんてつであそんだ (10, 213)
- 111 7・31 やまと川にいつた (18, 470)
- 112 8・1 やすよちゃんのたんじょうび
(9, 237)
- 113 8・2 地下てつ (8, 250)
- 114 8・3 おおさかからかえつた
(14, 405)
- 115 8・4 あがりやい (18, 424)
- 116 8・5 ゆうだち (18, 566)
- 117 8・6 川へおよいだ (13, 303)
- 118 8・7 やきゅう (32, 632)
- 119 8・8 そふとボールのけいこ
(40, 725)
- 120 8・9 うちやい (25, 581)
- 121 8・10 えがなかなかわからなかつた
(9, 203)
- 122 8・11 おつり (12, 465)
- 123 8・12 さかなとり (11, 248)
- 124 8・15 そふとのしやい (37, 719)
- 125 8・16 さかなとり (15, 413)

- 126 8・17 こままわし (11, 359) (8, 358)
- 127 8・18 さかなとり (15, 376)
- 128 8・19 けいぶるかー (9, 259)
- 129 8・20 ちゃんばら (26, 632)
- 130 8・22 川であそんだ (17, 384)
- 131 8・23 かんけり (16, 375)
- 132 8・24 いち (14, 259)
- 133 8・25 さいごのたいそう (7, 148)
- 134 8・26 学校へ行く日 (12, 231)
- 135 9・10 うんどうかい (19, 440)
- 136 9・11 うんどうかいのけいこ
(13, 354)
- 137 9・12 水はき (17, 370)
- 138 9・14 学校へいけなかった (12, 374)
- 139 9・15 山のしたがり (7, 271)
- 140 9・17 たいふう (18, 442)
- 141 9・18 学年べつりレー (19, 362)
- 142 9・19 はいしゃさん (16, 300)
- 143 9・21 ふっとべーすぼーる (42, 972)
- 144 9・23 すもう (11, 238)
- 145 9・25 やじろべ (51, 1339)
- 146 9・27 ねんどとり (21, 416)
- 147 9・28 なわとび (18, 418)
- 148 9・29 ずが (19, 498)
- 149 10・1 けんか (13, 418)
- 150 10・2 (無題) (12, 323)
- 151 9・23 むしとり (19, 559)
- 152 10・4 ほうすあそび (8, 271)
- 153 10・5 チェインがはずれた (15, 325)
- 154 10・6 いな光 (13, 329)
- 155 10・8 おとうちゃんのぼんぼん
(12, 472)
- 156 10・9 やっぱりまだ先生がおってないと
あかん (14, 396)
- 157 10・10 うえきばちをわった (23, 671)
- 158 10・12 ねいちゃんだけくろいへいった
(22, 588)
- 159 10・13 ずが (18, 514)
- 160 10・14 すもう (12, 426)
- 161 10・19 おばあちゃんのごんた
- 162 10・16 あしたのおまつり (12, 367)
- 163 10・18 3人ぬき (17, 410)
- 164 10・20 ふねおつくった (16, 346)
- 165 10・22 こままわし (16, 528)
- 166 10・23 すもう (18, 347)
- 167 10・24 しゃもんだま (20, 548)
- 168 10・25 せんせい (13, 515)
- 169 10・26 マラソン (25, 691)
- 170 10・27 ていでん (18, 456)
- 171 10・29 けんか (18, 543)
- 172 10・30 石はこび (15, 387)
- 173 10・31 マラソン (27, 728)
- 174 11・1 くるまおし (13, 506)
- 175 11・2 はち (6, 176)
- 176 11・3 おてつだい (13, 512)
- 177 11・4 え (21, 642)
- 178 11・6 しょくだいのかみ (21, 669)
- 179 11・7 おとしあな (22, 652)
- 180 11・8 4年のこにばおとられた
(12, 469)
- 181 11・10 山へいった (22, 613)
- 182 11・11 かたたたき (22, 724)
- 183 11・12 けんか (27, 800)
- 184 11・13 さくぶんのじかん (20, 822)
- 185 11・14 4年の子はずるい (10, 337)
- 186 11・15 りか (29, 707)
- 187 11・16 おじいちゃん (17, 590)
- 188 11・17 水かえ (14, 395)
- 189 11・18 おおさかえいっちゃった
(18, 615)
- 190 11・19 おおさかからかつちゃった
(16, 497)
- 191 11・21 にっきがわからへんだ
(22, 595)
- 192 11・22 きんろうかんしゃさい
(25, 826)
- 193 11・25 こまつくり (31, 750)
- 194 11・26 たいほうのゆうしょう
(18, 450)

- 195 11・27 えいごさん (15, 639)
- 196 11・28 すもう (27, 621)
- 197 11・29 かじ (24, 632)
- 198 11・30 けんか (14, 459)
- 199 12・2 にゅうせん (14, 473)
- 200 12・3 おこった (18, 597)
- 201 12・5 かたたたき (18, 499)
- 202 12・6 けが (45, 1316)
- 203 12・7 らっかさんづくり (29, 685)
- 204 12・9 おかあちゃんがかつちやった
(29, 936)
- 205 12・10 こううんき (26, 770)
- 206 12・12 しばをおうてかえった
(18, 492)
- 207 12・13 じしゅう (19, 640)
- 208 12・14 いちりんしゃ (7, 210)
- 209 12・15 かるたのえをかいた (17, 550)
- 210 12・17 しょうじょうをもらった
(20, 580)
- 211 12・18 7・5・3 (24, 814)
- 212 12・19 犬のめんづくり (15, 456)
- 213 12・21 ねんがじょうかいた (11・329)
- 214 12・22 あしたのつうしんぼう
(6, 229)
- 215 12・25 クリスマスケイキ (35, 734)
- 216 12・26 うし (10, 375)
- 217 12・29 ツボンがやぶれた (16, 553)
- 218 12・30 犬がきた (12, 262)
- 219 12・31 にわとりのくびがきられた
(16, 416)
- 220 1・8 しんちゃんがおこった
(12, 410)
- 221 1・10 99 (18, 462)
- 222 1・14 1りんしゃ (16, 480)
- 223 1・15 わかのはなやぶれた (11, 327)
- 224 1・17 ひないくんれん (17, 414)
- 225 1・19 おこった (14, 388)
- 226 2・? べこ (10, 213)
- 227 2・14 けが (20, 471)
- 228 2・16 かぜのはなし (8, 337)
- 229 2・18 おじいちゃんをむかえにいった
(10, 346)
- 230 2・19 (無題) (27, 801)
- 231 3・12 (無題) (17, 473)
- 232 3・14 すもう (12, 344)
- 233 3・16 (無題) (12, 343)
- 234 3・17 えをかいた (12, 400)
- 235 3・21 じんましん (13, 404)
- 236 3・23 びっくりさした (11, 294)
- 237 3・27 つうしんぼう (19, 548)
- 238 4・8 うけもちの先生 (9, 269)
- 239 4・9 いいん長とふくいん長がきまった
(19, 620)
- 240 4・11 ボールがないよになった
(17, 427)
- 241 4・12 てんきよほう (10, 255)
- 242 4・13 えをかいた (17, 479)
- 243 4・14 あきらくんとすもうした
(17, 479)
- 244 4・15 ウイスキー (13, 346)
- 245 4・16 でんわ (10, 336)
- 246 4・17 テスト (17, 397)
- 247 4・19 おおようもんだい (8, 208)
- 248 4・20 やきゅう (24, 449)
- 249 4・21 ツベルクリン (16, 433)
- 250 4・22 バットをつくってもろた
(16, 340)
- 251 4・23 ツベルクリン (10, 276)
- 252 4・25 たつろうくんとこの子
(10, 338)
- 253 4・26 テストをかやしてもろた
(12, 426)
- 254 4・27 じしゅうの時間 (15, 396)
- 255 4・29 ほかけぶねをつくった
(12, 353)
- 256 4・30 とびばこ (24, 568)
- 257 5・1 学校をやすんだ (34, 987)
- 258 5・4 たいくの時間 (21, 462)
- 259 5・6 あり (16, 513)
- 260 5・8 しょうちゃんがやいとをせいてもろ

- た (7, 271)
- 261 5・9 おつかい (15, 559)
- 262 5・11 (無題) (26, 706)
- 263 5・14 たうえ (15, 369)
- 264 5・16 ちえのわ (16, 479)
- 265 5・18 国ごの時間 (11, 289)
- 266 5・20 れんげえし (8, 295)
- 267 5・21 学校へいった (14, 241)
- 268 5・23 とびばこ (26, 721)
- 269 5・24 ずがのじかん (16, 508)
- 270 5・27 すもう (23, 577)
- 271 5・29 あなをほった (21, 530)
- 272 5・25 とびばこのけいこ (37, 1046)
- 273 5・30 マットベースボール (32, 738)
- 274 5・31 うし (10, 278)
- 275 6・1 トンネルをしっぱいした
(21, 521)
- 276 6・2 ふろもやし (16, 439)
- 277 6・4 テスト (12, 268)
- 278 6・7 (無題) (18, 641)
- 279 6・9 ギュウニュウをもっていった
(17, 421)
- 280 6・10 銀のたまごを作った (17, 487)
- 281 6・12 はきそうじ (12, 287)
- 282 6・14 銀のささ (11, 335)
- 283 6・15 きょうじくんがふくをよごした
(21, 626)
- 284 6・16 牛のはなをもった (11, 390)
- 285 6・17 しょうちゃんをさんぱつやへつれて
いった (14, 374)
- 286 6・18 どひょうつくり (22, 620)
- 287 6・20 じゅんいちくん (19, 594)
- 288 6・21 ずこうの時間 (13, 288)
- 289 6・24 せんきょうにまわった
(11, 331)
- 290 6・25 プールでおよいだ (9, 166)
- 291 6・27 わだ先生のえをかいた
(14, 333)
- 292 6・29 ほたるとり (19, 526)
- 293 7・2 ぜんこうテスト (12, 252)
- 294 7・3 こわかった (12, 396)
- 295 7・6 131とんだ (28, 754)
- 296 7・8 バレーボール (9, 326)
- 297 7・10 おじいちゃん (8, 214)
- 298 7・11 プールでおよいだ (18, 377)
- 299 7・14 なわにさがった (17, 385)
- 300 7・16 耳に水がはいった (24, 600)
- 301 7・18 やいとをせいてもらった
(19, 467)
- 302 7・20 かん字を書いた (14, 359)
- 303 7・22 せみとり (15, 364)
- 304 7・25 つうしんぼー (18, 490)
- 305 7・26 フットベースボール (20, 472)
- 306 7・27 うけやい (7, 153)
- 308 8・1 はいしゃ (15, 316)
- 308 8・3 高い波 (17, 503)
- 309 8・6 歌をうたった (10, 243)
- 310 8・7 ひとぼし (10, 333)
- 311 8・9 風がひどうふいた (11, 255)
- 312 8・13 ながさきへいっちゃった
(10, 253)
- 313 8・17 どもるのをなおしにいった
(30, 887)
- 314 8・18 だい・ももたろうの話をした
(17, 316)
- 315 8・19 うさぎとかめのかけくらべ
(10, 308)
- 316 8・20 自分の学校のなまえをいった
(6・137)
- 317 8・21 国語の本をよんだ (11, 326)
- 318 8・22 本をよむきょうそう (16, 378)
- 319 8・23 やっとすんだ (6, 149)
- 320 8・25 うし (9, 313)
- 321 8・27 すいえい大会 (25, 578)
- 322 8・30 40メートルおよいだ (15, 379)
- 323 8・31 1きゅうになった (17, 467)
- 324 9・3 牛をつれていった (13, 339)
- 325 9・4 はじきてっぽう (16, 464)
- 326 9・5 こんちゅうの本を見て
(17, 449)

327	9・17	作文を読んだ (12, 389)	331	10・30	マラソン (30, 916)
328	9・21	青じゃしん (7, 231)	332	11・5	まめひき (14, 435)
329	9・26	れいすいまさつ (16, 494)	333	11・6	まめこき (12, 399)
330	10・28	耳いしゃへいった (19, 588)	334	11・10	水でっぼう (19, 510)

純一郎君の日記が3年生2学期で途絶えた理由を、純一郎君の父上・小西健二郎氏は、次のように述べている⁽³⁾

日記はすっかり書かなくなってしまったのかどうか、はっきりしませんが、担任の先生が、数学・理科等が得意の方でしたので、その方の指導に力を入れられ、あまり日記指導等をなさらなかったのではないかと思います。

私・家内等の純一郎の日記についての関心がうすれていったことも、その理由の一つになると思います。

1年生当時、純一郎君の日記のひとつひとつには、担任である荻野幸雄氏の評語が添えられている。また随所に、荻野幸雄氏と純一郎君の父上・小西健二郎氏、母上・小西和歌子氏との間の連絡・質問・意見等が記されている。

注 荻野幸雄氏・小西健二郎氏は、ともに作文（生活綴り方）教育の実践家であり、「兵庫作文の会」「氷上作文の会」の中心的存在であった。

このような、恵まれた生活環境・学習環境の中で書き始められた純一郎君の日記も、(107冊, 648編もの文章が書かれながら)純一郎君の生活の中に、十分に位置づくものとはなっていなかったと考えられる。

1. 題材 (素材)

いま、純一郎君の日記を、それぞれの学年ごとに(1年生—314編, 2年生—237編, 3年生—97編)題材によって類別すると、右の表(表1)のようになる。

どの学年でも“遊び・お手伝い”に関するものがもっとも多く、“家庭”に関するもの、“学校”に関するものが、それに続いている。これらに“社会”に関するものを加え、“人事・生活”としてまとめると、いずれの学年でも、80%から90%の高い割合を占めている。これは、これらの学年(低学年)の児童の日記が、家庭・学校・遊びなど、身近な生活範囲の中で事件や出来事を題材(素材)とすることを示している。

(表1)

		純一郎君の日記 (%)		
		1年	2年	3年
自然現象 (季節・雨など)		4.8	1.7	1.0
地 文 (山・川・海・道路など)		0	0	0
人 事 ・ 生 活		81.2	80.6	91.7
内 訳	家庭(家・家族・自分など)	18.8	18.1	10.3
	学校(学級・学習・行事・友人など)	11.5	24.1	37.1
	社会(社会事象・行事・友人など)	10.8	4.6	8.2
	遊び・お手伝いなど	39.8	33.8	36.1
身 体 (健康・生死・けがなど)		0.9	1.3	3.1
動植物 (四つ足・鳥・虫・魚など)		10.8	5.5	3.1
雑 (夢・衣服・など)		2.5	1.7	1.0

いま、2・3年生の間に書かれた純一郎君の日記334編が、どのような題材によって書かれているかを、書かれた順に示すと、図1（本稿24ページ）のようになる。この表にみる限り、取材傾向の大きな変化はうかがえない。

右の表（表2）は、1964年〈昭和39年〉に、広島県教育研究所が行った調査の結果である⁽⁴⁾

この調査（表2）と、純一郎君のそれ（表1）とを比較し、次の2点を指摘することができる。

1. “社会”に関する題材を取り上げた

ものが、広島県教育研究所の調査では、5.9%、7.8%、8.5%と徐々に増加しているのに対し、純一郎君のものは、10.8%、4.6%、8.2%と推移している。

2. “学校”に関する題材を取り上げたものが、広島県教育研究所の調査では、4.9%、18.6%、3.4%であるのに対し、純一郎君のものは、11.5%、24.1%、37.1%と増加している。

まず、“社会”に関する題材であるが、純一郎の1年生の日記（314編）には10.8%（34編）みられ、そのほとんどが友人を取り上げた、次のようなものである。

ずるいやないかい

（1月13日）

ママ やっちゃんとこの、よこで／みのちゃんが、すべると、／いってでした。

ゆきが、ないので、すべりません。

すべれ^(ない)べんので、みのちゃ／んが、「ごつい^(大きな)、ゆきだるま／つくって、こいと、いって、／でした。

ぼくと、やっちゃんと、／つくり、いきました。

でも、みのちゃんは、つ／くり、きて、なかつた。

ああみのちゃんずるいや／ないかい。

ひとに、さし^(させておいて)といて、じ／ぶんだけ、あそんどってや。

だいぶん、ながくなった。

もうよいと、おもって、／いました。

みのちゃんが、「もっと、／つくってこい。」と／いって／でした。

てが、ひりひりしました。

でも、つくりました。

みのちゃんは、^(いい機嫌で)上^{ママ}でよい／きに、すべつとってで／した。

ぼくは、おこつた^(おこりたいようなまもちでした)いよう／でした。

でも、こわくて、ようおこ^(おこることができなかった)／らん、だ。

ぼくは、「ふん。」と、いって／、わたしました。

みのちゃんが、「おまい^(おまえな)／いかつしよう。」と、いうちや^{ママ}／た。

ぼくが、こうけい^(たぐさん)つくつ／ても、なかなかさしとくれ^(させてくれなかつた)／いへんだ。

じぶんひとりで、しとって／でした。

（表2）

(%)

		広島県教育研究所		
		1年	2年	3年
自然現象（季節・雨など）		6.9	25.5	15.4
地文（山・川・海・道路など）		0	0	0
人事・生活		81.2	68.6	76.0
内 訳	家庭（家・家族・自分など）	14.9	1.0	14.5
	学校（学級・学習・行事・友人など）	4.9	18.6	3.4
	社会（社会事象・行事・友人など）	5.9	7.8	8.5
	遊び・お手伝いなど	55.5	41.2	49.6
身体（健康・生死・けがなど）		1.0	0	0.9
動植物（四つ足・鳥・虫・魚など）		10.9	5.9	7.7
雑（夢・衣服・など）		0	0	0

遊びの中で気付いた友人の“ずるさ”を取り上げたものである。遊びの中での“したこと”や“出来事”のら列のみに終わらず、“しのちゃん”の“ずるさ”をあらわす言動と、それに対する思いとが取り出されている。

これら、“社会”に関する題材は、行動を中心として取り上げると、“遊び”に関するものとなる。観察（または観察に基づく思考・感情）によらなければ、“社会”に関する題材は成立しないからである。

1年生の2学期の後半、11月頃から、このような“社会”に関する題材がみられるのは、上の理由によると考えられる。

2・3年生の間に書かれた純一郎君の日記（334編）のうち、“社会”に関する題材を取り上げたものは、次の19編である。

- | | | |
|-----|-------|--------------------------------|
| 12 | 4・13 | えんそく |
| 25 | 4・26 | （さしとくれいというといて）
さしとくれいというといて |
| 114 | 8・3 | おおさかからかえった |
| 122 | 8・11 | おつり |
| 132 | 8・24 | いち |
| 133 | 8・25 | さいごのたいそう |
| 142 | 9・19 | はいしゃさん |
| 162 | 10・16 | あしたのおまつり |
| 170 | 10・27 | ていでん |
| 195 | 11・27 | えいこさん |
| 197 | 11・29 | かじ |
| 310 | 8・7 | ひとぼし |
| 313 | 8・17 | どもるのをなおしにいった |
| 314 | 8・18 | だい・ももたろうの話をした |
| 315 | 8・19 | うさぎとかめのかけくらべ |
| 316 | 8・20 | 自分の学校のなまえをいった |
| 317 | 8・21 | 国語の本を読んだ |
| 318 | 8・22 | 本を読むきょうそう |
| 319 | 8・23 | やっとすんだ |

上の“社会”に関する題材を取り上げた日記のうち、友人を取り上げたもの（1年生の日記では“社会”に関する題材のほとんどが友人を取り上げたものであった）は、25の「さしとくれいというといて」、195の「えいこさん」の2例のみである。また、313の「どもるのをなおしにいった」から、319の「やっとすんだ」までの7編は、1週間の吃音矯正に通ったという出来事を書いたものである。

広島県教育研究所の調査では、各学年とも“社会”に関する題材のほとんどが旅行を取り上げたものであることから、純一郎君の日記にみられる“社会”に関する題材の減少傾向は、その人間関係・行動範囲が、限られた狭いものであったことによると考えられる。

次に、“学校”に関する題材を取り上げたものが増加傾向を見せている点である。

純一郎の日記のばあい、“学校”に関する題材のほとんどは、授業についての、次のような内容の

ものである。

63 みずぐるま

(6月6日)

りかのじかんになりました。

だいこんと、ぼうる、がみを、／だしました。

せんせいが、「つくりなさい。」／といて、でしな。

ぼうるがみを、だいこんに、さ／そうとおもって、ぎゅうぎゅうと、／さしました。

でも、させません。

ぼくは、やすおくんは、はさみ／を、かしてもろて、あなを、あけ／ました。

それをさして、いきました。

だいぶんさすと、あきらくんが、／「できました。」と、いってこうどう／のよこのすいどうへいって、で／した。

ぼくも、あわててして、できま／した。

すいどうから、水を、だして、／みずぐるまに、水を、あてました。

すると、うるちよろちよろ／しながら、まいました。

水が、うしろへ、とんできまし／た。

ぼくは、「ぼくのようまうじょ／う。」と、いいました。

すると、あきらくんが、「ぼくの／んかっちゃん。」と、いって、でし／た。

まゆみさんが、「まわさしとしい。」／と、いうちゃったので、まわさし／たげました。

水が、おちる下に、みずぐるまを、／やって、でした。

かいの中に、水がはいて、／くるくるつと、まわりました。

すると、ものすごいいきよいで、／ぐるぐるぐるぐると、まいました。

まゆみさんが、ようまうようま／うと、いって、よろこんででした。

ようこさんが、きちゃっておお／ぜいが、きてでした。

ぼくは、きょうしつに、いきま／した。

きよしくんは、せんせいに、つ／くって、もらいよって、でした。

ぼくは、また、むこうに、いっ／て、ちいとま、まわしてでそんどう／たら、さいれんが、／なつて、おわ／りました。

ぼくは、いえに、かいたら、／かいで、もっと、じょうとうつく／ろと、おもいました。

理科の授業中のことがらが、時間的順序に従って素直に書きつらねられている。

純一郎君の父上・小西健二郎氏は、2・3年のときの担任について「数学、理科等が得意な方でした…」と述べておられる。これらから、2・3年で“学校”に関する題材を取り上げたものが漸増している理由として、純一郎君が算数、理科等の授業に次第に興味を持ち、日記にもそれらの授業内容を書くようになったことが考えられる。

2. 構 想

純一郎君の日記は、すべて、はじめに中心点を決め、書くことがらを取り上げ、配列を考えてか

ら一きっちりとした構想を立ててから一書かれたものではない。思い出すままに、あるいは、興味中心に書き進めていくうちに、自然に構想ができ、まとまったものである。したがって、そのほとんどが時間的順序によって書かれた文章といえる。

純一郎君の日記の構想を、国立国語研究所⁽⁶⁾・広島県教育研究所の調査と比較すると、右のようになる。国立国語研究所の調査は課題作文、広島県教育研究所の調査は自由題作文によるものであるが、数字にみる限り、純一郎君の日記の構想は、国立国語研究所の調査に近いものといえる。また、純一郎君の文章に組織的な構想をもったものが見られないのは、日記として書かれたためと考えられる。

段落については、1年生のはじめにベタ書きがみられるが、他はすべて1文1段落の形をとっている。これは、純一郎君の日記が、すべてマス目のノートを用いて書かれていることによると思われる。

3. 記述

① 記述量（文字数、文数等）

純一郎君の日記の、1編あたりの平均文字数、平均文数、1文あたりの平均文字数を、それぞれ、他の調査⁽⁶⁾と比較すると、右のようになる。

1年生に限って見ると、純一郎君の日記は、文字数、文数、1文文字数いずれに関しても高い数値を示している。しかし、2年生、3年生と進むにしたがって、他の調査が横ばいまたは増加傾向をみせているのに対し、純一郎君の日記のそれは、横ばいまたは減少傾向をみせている。

いま、純一郎君の日記の、1編あたりの平均文字数、平均文数、1文あたりの平均文字数を、書かれた順に示すと、図2から図4（本稿24ページ）のようになる。いずれの図にも、全体としての大きな傾向・変化はみられない。ただ、1編あたりの文字数が900字を越えるものが、1年生では19編であるのに対し、2・3年生では11編、逆に200字以下のものが、1年生では27編、2・3年生では12編となっている。このことから、2・3年生では、日による（または題材による）記述量の差が小さくなっており、安定したものとなっていると

(表3) 国立国語研究所 (%)

	1年	2年	3年
興味中心的	78.1	75.7	72.5
ら列的	12.5	5.4	2.5
組織的	9.4	18.9	25.0

(表4) 広島県教育研究所 (%)

	1年	2年	3年
興味中心的	20.8	41.7	55.9
ら列的	71.3	45.6	31.4
組織的	0	11.7	11.9

(表5) 純一郎君の日記 (%)

	1年	2年	3年
興味中心的	79.8	91.5	98.8
ら列的	20.2	8.5	1.2
組織的	0	0	0

(表6) 平均文字数 (%)

	1年	2年	3年
新潟県立教育研究所	363	460	569
国立国語研究所	215	310	372
広島県教育研究所	240	617	795
小西純一郎君の日記	507	465	429

(表7) 平均文数 (%)

	1年	2年	3年
新潟県立教育研究所	16.0	16.0	16.0
国立国語研究所	9.5	12.0	11.9
広島県教育研究所	10.9	24.3	27.0
小西純一郎君の日記	14.6	17.0	15.7

(表8) 一文あたり平均文字数 (%)

	1年	2年	3年
新潟県立教育研究所	22.7	28.0	35.0
国立国語研究所	22.6	24.8	26.5
広島県教育研究所	22.0	25.4	29.4
小西純一郎君の日記	34.8	27.4	27.3

いえる。

また、図5（本稿26ページ）は会話文の比率、図6（本稿26ページ）は1文あたりの文字数の偏差値であるが、いずれも大きな傾向・変化はみられない。

以上の考察から、2・3年生の間の純一郎君の日記にみられる、記述量（文字数、文数等）について、次のようにまとめることができる。

1. 児童に課した“作文”と自由に書いた“日記”の間には、記述量に大きな違いがある。
2. 各文章間の記述量の差は、1年生よりも2・3年生で小さく、安定したものとなる。
3. 記述量の、学年内での大きな傾向・変化はみられない。

② 表 記

㊦漢字 純一郎君の文章が“日記”として書かれたものであり、“作文”として書かれたものよりも、漢字の使用率が低いことが予想されたが、他の調査と比較すると、右の表のように、必ずしもその使用率が低いとはいえない。また、国立国語研究所の調査では、漢字の使用量の増加を語いの拡充によるものとしているが、純一郎君の日記にみる限り、そのような例はみられない。

㊧片仮名 使用率（1文あたり平均片仮名使用率）の他調査との比較は、右の表のとおりである。片仮名の使用は、児童の環境、調査時期等によって大きな差が出るのが考えられるが、純一郎君のばあい、片仮名で表記されているものの大部分はスポーツに関する外来語および擬態語で占められている。

下は、3年生の1学期（4月20日）に書かれた日記である。

248 やきゅう

（4月20日）

学校へあそびに[㊦]いってやきゅう／うをしました。
はじめぼくやが、まもり／ました。
ぼくがびっちゃんをしま／した。
1ばんは、しょうちゃん／でした。
ぼくは、うたそうと、思／いました。
なげました。
しょうちゃんが、ポカんと／ぼくのまっしょうめんへうち／ました。
とって1ルイへ、なげまし／た。
あぶとです。
ひろいちくんは、つうスト／ライクになりました。
なげると、バンドを、して／でした。
とったと、思うと、つうちゃ／んが、とととで[㊦]でした。
つうちゃんは、ゆっくりと／1ルイへなげてでした。

（表9）

(%)

	1年	2年	3年
新潟県立教育研究所	0.023	0.17	0.6
国立国語研究所	0.1	0.6	1.4
広島県教育研究所	0.005	0.6	1.1
小西純一郎君の日記	0.06	0.36	1.03

（表10）

(%)

	1年	2年	3年
新潟県立教育研究所	0	0.7	1.4
国立国語研究所	0	0.6	3.6
広島県教育研究所	0	5.0	9.9
小西純一郎君の日記	0	2.4	6.7

2だんになりました。

まもるちゃんは、ヒットを／うってでした。

やっちゃんであぶとにして／でした。

こんどは、ぼくらのば／んです。

1ばんのしんちゃんあぶとです。

つうちゃんが、サンシンし／てもかまへんさかいおも／いきりバットを、ふってんと、／いうてでした。

からふりで、つうストライク／になりました。

ぼくは、バットを、ながく／もちました。

そして「ポン。」と、うちま／した。

すると、やっちゃんを、こ／えて2ルイラです。

たかゆきくんがうっちゃっ／て、ぼくは、ホンルイへはい／りました。

擬音語は正しく表記されているものの、外来語に関しては、「びっちゃー」「あぶと」あるいは「1ルイ」「サンシン」など混乱や誤用がみられる。これらは、外来語であることなど言葉の意味を十分に理解していないことによるものと考えられるが、片仮名表記の増加する過渡期の現象といえる。

②仮名遣い 1年生の段階で数多くみられた助詞の誤用、拗音・促音・長音の表記の誤りは、2・3年生ではほとんどみられない。しかし、話しことば（兵庫県氷上郡地方の）をそのまま文字化した表記の誤りは、2・3年生の日記にも数多くみられる。そのいくつかを取り出すと、次のようなものがある。

ぜんぶ（全部）——でんぶ

かぞえる（数える）——かずえる

ざんねん（残念）——だんねん

くみあい（組合）——くみやい

まぜる（混ぜる）——までる

これらの表記の誤りについては、評語・朱筆による指導はみられない。

③ 描写・表現

次の2編は、いずれも1年生の3学期に書かれた「日記」であり、すぐれた描写・表現のみられるものである。

おかしいな

（2月28日）

2じかんめりかです。

ぼくたちは、うんどうじょ／うにでました。

ぼくたちは、かげを、う／つしたりしました。

せんせいが、てつぼうの、／かげに、あわせて、せんを、／ひいてでした。

ほんで、てつぼうの、か／げの、てっぺんちょうに、／たけを、さしてでした。

せんせいが、「これちい／としましたら、かげがかわる。」／と、いってでした。

じっと、目で、かげを、／みていました。

でも、なんにも、うごき／ませんぼくは、もうむこう／へ、いきました。

すると、きょうじくんが／「あっかげがかわつとる。」と、／いってでした。

ぼくは、はしって、みに／いきました。
 ほんとに、ぼくの、おや／ゆびぐらい、ひが、ひがしのほう／へ、いっていました。
 ぼくは、「かわつとる。」／と、いいました。
 「せんせいもうびつとだけかわつとるで。」と、いい／ました。
 せんせいは、うれしそう／なかおしとってでした。
 せんせいは、「そつたらなんで、かわつたんですか。」／と、いってでした。
 みんな、そら、「お日さん／が、うごきよるさかいやな。」／と、わらいながらいいまし／た。
 せんせいは、「ちがいます。／どんなえらい人に、きいて／も、お日さんは、じつとし／とると、
 いうてや。」と、いっ／てでした。
 「ぼつたら、お日さんが、しず／んでんなんでや。」と、いいました。
 せんせいが、「ちきゅうが、うご／きよるさかいや。」と、いうちやつた。
 そやけど、おかしい。
 ママ(ゆ) (うごいていたら) (だつて) (だつて)
 ちきゅうが、うごきよつたら、土／かて、いえかて、うごくはずや。
 そやけど、なんにも、うごけへん。
 ぼくは、そや、土に、かこいを、／かいて、その、中^{ママ}に、石を、おい／たらよいと、おもって、そ
 うしま／した。
 そやけどと、おもつたけど、いっ／ペンしやんと、わからへんと、お／もつて、して、おきまし
 た。
 べんとうが、すみました。
 ぼくは、てつぼうの、かげを、／みに、いきました。
 2じかんめは、ちいとやつたけ／ど、いまは、もう、ぼくらが、足を／ちから、いっばい、ひら
 けるくら、／いでした。
 こんど、ぼくは、かこいしとつたところをみ／にいきました。
 でも、さつきと、おんなじでした。
 お日さんは、うごいて、だいぶ／んにしがわに、いっていました。
 ぼくは、お日さんが、とまつと／るとは、おもえませんでした。
 ぼくは、また、かいりしに、て／つぼうの、かげを、みました。
 もう、いっしょうけんめい、2／ほ、くらしいに、なっていました。
 あしたに、なつたら、また、か／げが、すじかいとつたところ、お／んなじに、なれへんやろうか
 とも／いいました。

おかあちゃんえらいやろ

(3月11日)

ぼくが、がっこうから、かえりました。
 おっこいばあちやが／「ごはんをたべてからお／かあちゃんを、むかい／にいってつととくれい。」／
 と、いってでした。
 ぼくは、いそいで、／ごはんを、たべました。
 ごはんを、たべよつ／たら、ひろこねいちゃ／んが、かえつてきて、／「おかあちゃんが、お／
 じいちゃんに、むかいにきてもうとくれと、／いうちやつたで。」と、／いいました。
 ぼくは、ごはんを、／たべかけで、とんで、／いきました。
 けいこちゃんとこの／ほうの、みちを、あが／りよつたら、おかあ、／ちゃんが、みちの上を／と

う^マりよっちゃった。

あっしまった。おそ^マかったかと、おも^マって^マは^マし^マて、あがりまし^マた。

おかあちゃんは、あ^マせを、ぼとぼと、おと^マしながら、くるまを、^マひ^マっ^マば^マつ^マて、いきよ^マつ^マて
でした。

ぼくは、おかあ^マちゃ^マん^マえ^マら^マい^マや^マら^マう^マか。

おじい^マちゃん^マが、い^マっ^マた^マげ^マち^マゃ^マつ^マた^マら^マよ^マい^マの^マに^マと、おも^マいま^マし^マた。

さ^マか^マを、おじい^マち^マゃ^マん^マが、ひ^マっ^マば^マつ^マて、お^マり^マて^マで^マし^マた。

か^マい^マつ^マて^マか^マら、おじ^マい^マち^マゃ^マん^マが、「ざ^マん^マね^マん^マや^マつ^マた^マや^マろ。」と、い^マっ^マて^マで^マし^マた。

いずれも、単なる観察を越えた、心よせと思いやりとが、全体をつらぬいており、観察・描写の
詳しさが、思い・考えのこまやかさとして表現されている。

1年生3学期の段階で、このような描写力・表現力をふまえ、2・3年生での変化・発達につい
て、以下、考察を加えたい。

2年生・3年生の日記の題材として、弟や友人との“すもう”がくり返し取り上げられている。
それは、下の7編である。

44	すもう	(5月15日)
95	すもう	(7月15日)
160	すもう	(10月14日)
166	すもう	(10月23日)
196	すもう	(12月28日)
243	あきらくんとすもうした	(4月14日)
270	すもう	(5月27日)

最初に「すもう」を取り上げた日記、44の「すもう」(5月15日)は、次のようなものである。

44 すもう (5月15日)

ぼくは、「しょうちゃんすもうしよ^マか。」と、い^マいま^マし^マた。

しょう^マち^マゃ^マん^マは、「し^マよ。」と、い^マいま^マし^マた。

ど^マん^マと、ぶ^マつ^マか^マり^マま^マし^マた。

ぼくは、手^マを、ば^マつ^マと、ま^マえ^マに、^マや^マつ^マて^マま^マわ^マし^マを、と^マり^マま^マし^マた。

しょう^マち^マゃ^マん^マは、ま^マだ、ま^マわ^マし^マを、と^マつ^マて、い^マま^マせ^マん。

ぼくは、う^マわ^マて、な^マげ^マを、し^マま^マし^マた。

す^マると、ば^マつ^マと、ま^マわ^マし^マを、も^マつ^マて、こ^マし^マを、ひ^マく^マく^マし^マま^マし^マた。

ぼ^マくの、手^マが、す^マべ^マつ^マて、ま^マわ^マし^マが、は^マず^マれ^マま^マし^マた。

ぼ^マくはち^マく^マし^マょう^マま^マわ^マし^マを、つ^マか^マま^マえ^マた^マな、と、おも^マつ^マて、し^マょ^マち^マゃ^マん^マの、手^マを、ぼ^マくの、ば^マん^マど^マか^マら^マは^マな^マし^マま^マし^マた。

こ^マん^マど^マは、み^マぎ^マよ^マつ^マつ^マに、な^マり^マま^マし^マた。

ぼ^マくは、よ^マう^マし^マと、おも^マつ^マて、う^マち^マが^マけ^マを、し^マま^マし^マた。

し^マょう^マち^マゃ^マん^マも、き^マり^マか^マえ^マて、^マう^マち^マが^マけ^マを、し^マま^マし^マた。

に^マん^マぎ^マょう^マみ^マた^マい^マに、ま^マつ^マす^マぐ^マに、な^マり^マま^マし^マた。

す^マると、こ^マっ^マち^マへ、ぐ^マつ^マと、ね^マて、き^マま^マし^マた。

すると、ぼくが、まけました。

しょうちゃんが、「へんだ。」と、／いいました。

ぼくは、「どうしたんじょう。」と、／いいました。

しょうちゃんは、にこにこ、^{△△}し／て、ぼくの、ほうを、むきました。

ぼくは、もういっぺんしよか、／と、^{△△}いって、すもうを、しました。

弟との「すもう」の様子が、時間的経過にしたがって、詳しく生き生きと描写されている。比較的短い文による、たたみかけるような表現は、具体的であり、また、自分の動作を客観的に説明しようとする姿勢がみられる。

しかし、「すると、ぼくが、まけました。」では、どのようなようになったので負けたのかは判らない。また、この一文以降、表現がやや冗長なものになっている。それは、この日記の力点が「すもう」の経過（展開）の描写におかれたためと考えられる。

この44の「すもう」の2か月後に書かれた、95の「すもう」は、次のようなものである。

95 すもう

(7月15日)

^{△△}しょうちゃんとすもうを、しまし／た。

のこったといっ／てがっぷりくみ／ました。

ぼくは、おしました。

しょうちゃんが、うわてなげし／ました。

^{△△}またまんなかまできました。

ぼくは、そこで、おおひかりみ／たいにふりまわしました。

そして、そとがけをしました。

まだこけません。

たたみのふちまで、^{△△}おして、いっ／て、ごいとおしました。

^{△△}もうでとるやろと、おもたけど、／でていへんで、うしろにまわって、／おしだされました。

また、この95の3か月後に書かれた166の「すもう」は、次のようなものである。

166 すもう

(10月23日)

^{△△}朝がっこうへいって、すも／うしようかと、いいました。

するとみんなが、「し／よ。」と、いうちゃったのでき／よしつの中に、ちようく／でまるを、かきました。

1ばんは、ぼくと、あき／らくんです。

あきらくんは、口を、と／がらして、おしてでしました。

ぼくものどわを、しまし／た。

あきらくんは、おしのほ／うが、つよいので、くみま／した。

そして、1ぺんうわてな／げ／しました。

でもこけてないです。

あきらくんは、こしを、／ひくくしてとってでした。

ぼくは、手やらおなから／あを、うへへやって、おこ／しました。

そして、そとがけ^{▽▽}しまし／た。
 あきらくんは、手を、は／なしてでした。
 ぼくは、足を、ぼんとけ／りました。
 ふらふらと、してでした。
 そこを、ごいと、おしました。
 あきらくんは、でてでし／た。
 ぼくのかちです。
 それから、かずおくんや／ら、やすおくんやらしまし／た。

ここでは、44, 95の文章と比して、記述・表現がより一層具体的になっている。

そして、1ぺんうわてなげ^{▽▽}をしました。でも、こけてないです。あきらくんは、こしを、ひくくしとってでした。

上の3つの文は、自分の動作、それに対する相手の反応、その理由、と考えられる。ここには、ただ詳しいだけではなく、自らの判断も含めた、論理的展開の形をとって描写しようとする姿勢がうかがえる。

196の「すもう」は、次のようなものである。

196 すもう

(11月28日)

おべんとうがすんだのでぼくは、／すもう^{▽▽}しょかと、いいました。
 こうどうへいってまるを、かき／ました。
 そしてしました。
 きよしくんが大ぜいこかしてで／した。
 5年の子が、みとってでした。
 ぼくと、きよしくんのぼんにな／りました。
 大ぜい「きよしーきよしー。」と、／いってでした。
 ぼくは、どかんと、ぶつかりま／した。
 きよしくんは、ごりらみ^{▽▽}たいな／かおをして、のどわをしてでし／た。
 どひょうぎ^{▽▽}わまでおいつめられ／ました。
 ぼくは、にげてまえみつを、と／りました。
 でもきよしくんは、のどわでお／してでした。
 まだつかまえていへんもういっ／本^{▽▽}のでで、くびにかかるとる手を、／とりました。
 もぐってもうだし^{▽▽}になりました。
 よしこれでよいと、思^{▽▽}ってごい／ごいおしていきました。
 きよしくんは、「へえへえ。」^{▽▽}ゆう／てがんば^{▽▽}とってでした。
 どひょうぎ^{▽▽}わまでおいつめたけ／どうわてなげしてはんたいに、ま／わしてでした。
 ちくしょうと、^{▽▽}思^{▽▽}って、ぼくは、／よこに、にげました。
 そして、手を、はなしてつっぱ／りやいでいきました。
 ぼくもつっぱりは、つよいから／です。
 ぼくは、目をむいて、「はあはあ。」／いいながら、のどわでおしました。
 きよしくんは、口を、あけてが／いこつ^{▽▽}み^{▽▽}たいなかおを、してでし／た。

ごくは、^マっぱつあたまでぶつ／かってぼいと、おしました。
 きよしくんはまけてでした。
 つぎは、やすおくんとしてから、／あきらくんの、のどわまけまし／た。
 それからいっばいしました。
 さいれんが、^マなったのできょう／しつへはいりました。

先の166の「すもう」では、相手からの働きかけは書かれておらず、すべて自分の働きかけへの反応として描写されていた。それに対して、この196の「すもう」では、「きよしくんは、ごりらみたいなかおをして、のどわをしてでした。」「どひょうぎわまでおいつめたけどうわてなげしてはんたいに、まわしてでした。」等、相手からの働きかけを、具体的・客観的にとらえようとする姿勢がみられる。

7編の「すもう」を取り上げた日記のうち、最後に書かれたのが、次の270の「すもう」である。

270 すもう

(5月27日)

^マぎょうは、雨が、ぴちぴち／ふって、外であそべません。
 しょうちゃんが、「^マなんど／うして、あそぼけい。」とい／いました。
 ぼくは、「くろぼしと、しろぼしを、つけて、すも／うをしよか。」と、いいました。
 しょうちゃんは、「よし。」と、／いいました。
 ぼくは、ほんまのすもう／は、15日かんやさない、／15かいせんに、しました。
 そして、しました。
 ぼくが、3しょう1ばい／になりました。
 5かいめです。
 「のこった。」と、いって、／たちました。
 ぼくは、おもいっきりつ／ぱってみようと、思って、ぼ／いん、ほいんと、つっぱり／ました。
 しょうちゃんは、2たおしで、ずずずと、／しきの^マせんまで、いきました。
 ぼくは、^マっぺんやと、／思うと、しょうちゃんは、／まだのこって、ぶちあ／たってきました。
 がっぷりよつになりまし／た。
 ぼくは、あたまを、つけ／て、しょうちゃんが、もっ／とる、まわしを、きりまし／た。
 そして、ぐっぐつと、どひょう／ぎわへ、おいつめ、まし／た。
 もう、「^マかったもんや。」と、／よしよったら、しよ／うちゃんに、もぐられまし／た。
 ぼくは、しょうちゃんの、／はらを、もって、ぐつと、／力をいれました。
 そして、ふらふらしなが／ら、かたにかつぎました。
 しょうちゃんは、目を、／むいて、「^マきゃあ。」と、い／いました。
 ぼくは、どうじゃと、思って、／、つりだしました。
 そして、かちました。
 8かいまでして、やめま／した。
 てんは、ぼくの、^マ6しょう／しょうちゃんの、2しよ／うでした。

ここでは、

ぼくが、3しょう1ばいになりました。

5 かいめです。

.....

.....

8 かいまでして、やめました。

と、表現意識に基づく省筆の技法が、より進んだ形で用いられている。

また、「ぼくは～と思って～しました。」と自分の動作の理由(根拠)とそれに伴う動きが表現され、「しょうちゃんは～ました。」とそれに対する相手の具体的な様子が描写されている。

さらに、

しょうちゃんは目を、むいて、「きやあ。」と、いいました。

という1文の、「目を、むいて」は、前後の文章から、純一郎君が実際に見たとは考えられない。このような、想像による描写が、また表現の具体性を増していることは、この段階のものとして注目に価する。

以上、「すもう」を取り上げた7編の日記によって、2・3年生の間の描写力・表現力の発達(変化)を考察してきた。2・3年生の間の発達(変化)には、1年生の1年間のような大きな差はみられない。それは、むしろ、純一郎君が「すもう」を題材とした文章で何を描写・表現しようとしたか、その意図による差と考えられる。ここに、表現意図によって文章形態を選ぶ、そのような能力の発達をみることができる。

また、自分の動作を主とした表現から、相手の動作の表現へ、さらに、自分の思い・動作の根拠(理由)、相手の動作の校拠(理由)へと、その内容が複雑化している。

単なる、詳しい描写・表現から、短時間のことがらを思い出し再編成していく(時には想像も加えて)力は、明確な主題意識に基づく、次のような文章に、より一層発揮されている。

217 ツボンがやぶれた

(12月29日)

学校の木のすべりだいを、すべり／ました。

さーっと、ものすごいいきよ／いで、すべりました。

下の方へきてぼくは、「いた。」／と、いいました。

下へおりてむこうへいきよった／ら、きよしくんが、「じゅんいち／ろうくん、おまいけつがやぶれと／るぞ。」と、いってでした。

ぼくは、「えっ。」と、いってお／しりを、さわると、やぶれていま／した。

ぼくは、さっきいたかったとき／やぶれたいやろうと、おもいました。

またすこしいくと、まゆみさん／が、「じゅんいちろうさんの下の毛／糸のぱっちもやぶれとうら。」と、／いってでした。

ぼくは、目をまるくして中ま／で、手をつっこみました。

あながあいていました。

ぼくは、きょうあんでもろうたや／つや。はかんといたらよかった／とおもいました。

ぼくは、ものすごくしんばいし／ました。

2時30分ごろ家へかえりまし／た。

ぼくは、いうたら、おこられる／と、思っちいとまいわへんだけ／ど、どうせいみつかるさかい、

「／あおう。」と、いって口を、いがめ／ていいにくそうに、いいました。

おかあちゃんは、「じろっと、／こっちをむいて、「まあ、きょう／あんだげたところやのにもうやぶ

っ／てきたん。」と、びっくりしてでし／た。

おかあちゃんが、ぱっちを、あ／んばいしよってでした。

しちゃったので、みると、あな／のあいたところは、ちょっと、おか／しなっ／とったけどうまいことひっ／つけたりしました。

“ズボンがやぶれた”という出来事を中心に、その発端から、学校でのこと、家へ帰ってからのこと、結びと、無駄のない、具体的で詳しい描写・表現がみられる。また、このような描写・表現が、一方で、不安・決心・告白・安どという心の動きを、具体的に詳しく表わすものともなっている。

このような点から、この「ズボンがやぶれた」は、“出来事の、具体的で詳しい描写・表現が、また、一方で、思考・感情の、具体的で詳しい描写・表現にもなる”段階にある、すぐれた文章といえる。

下の「あしたのつうしんぼう」は、「ズボンがやぶれた」とほぼ同じ時期（2年生の12月）に書かれたものであるが、その表現力に大きな差異がみられる。

214 あしたのつうしんぼう

(12月22日)

ぼくは、あしたのつうしんぼうも／うもさがとらへんやろかあがと／らへんでもよいさかい、さがと／らへんだらよいのにとおもいまし／た。

ぼくは、たいくたいいさがと／とるぞそやけどほかのんがあがと／とったらよい。あがとといとくれ／いたらよいのにな。あがととった／ら、よろこぶけどさがと／とったらき／しょくがわるい。あがとととく／れいたらよいのにな。あしたのつ／うしんぼたのしみや。さがとと／てもしうないまた3がつきが／ん／ばたらよいやとおもいました。

ひどうさがと／らへんだらよいの／にな。

“通信簿”についての思いや考えを頭に浮かぶままに書き連ねたためか、舌足らずで混乱した表現がみられる。また、その表現も、ら列的・表出的なものになっている。

純一郎君の日記にみる限り、この段階（2年生の12月）では、具体的な出来事や経験によった日記（文章）と、思考・感情のみを取り上げた日記（文章）との間には、描写力・表現力—それは構想力・論理的思考力と密接に結びつくと考えられる。—に大きな開きがあるといえる。

また、具体的な出来事や経験によった日記（文章）においても、その出来事や経験に対する興味・関心が低くばあ、ら列的な描写・表現が多くみられる。

いま、その例である141の「学年べつりレー」を、同じ時期（2年生の9月18日と25日）に書かれた145の「やじろべ」と並べ、比較したい。

141 学年べつりレー

(9月18日)

がくねんべつりレーになり／ました。

せんしゅだけいきました。

そして、ならびました。

ばとんた／ちのけいこを／して、いよいよはしる／ように／なりました。

1ばんは、まゆみさんで／す。

てっぼうがなって、はしっ／てでした。

1ばんは、1年生です。

まゆみさんは、ぼくにば／とんたっちしてでした。

ぼくは、力いっばいはし／りました。

ぼくは、いま1ばんどこやろ／と、思いながら、はし／りました。

ぼくは、3年のこに、2／年やろと思てばとんたっち／しよったら、3年の子がば／とんたっちしてでした。

なんやおかしいと思つたら、／そこは、3年のところ／でした。

あわててかおるさんに、／ぼとんを、わたしました。

3年は、5ばんです。

1ばんしまいは、やすお／くんです。

まんなかのへんでいっしょ／になりました。

おいぬいたかと、思いまし／た。

でもまた、ぬかれました。

ぼくは、5ばんであたり／まえやと、思いました。

145 やじろべ

(9月25日)

きんよう日に、やまだ／先生が^{▽▽}あしたは、しゅうぶん／の日です。「だから、やじろべをつくって、25日の日をもって／きてくださいと、いいまし／た。

きょうは、しゅうぶんの／日です。

9じになりました。

ぼくは、ようしと思っ／て、はりがねをきりました。そして、つくったけど、で／きませんでした。なかなかたてれへんだの／で、きしょくなって、つぶ／しました。

日よう日は、おばあさん／といっしょに、やしろおん／せんへいきました。

月よう日のあさになりまし／した。

6じごろに、おかあちゃん／におこされました。

ぼくは、^{▽▽}ごはんを、たべ／おわると、おじいちゃんが／やじろべのさすやつを、たけ／でつくってでした。

ふくを、きて、ぼくは、／すいじばへ、いきました。／さつまいも^{▽▽}を、きりまし／た。

そして、ま^{▽▽}、しかくに、／切りました。

そして、さしました。

ようしこんどは、まん中／や、ぼくは、大きいのんを、／きって、さしました。

また、もう一ちょうの、よ／このんを、きりました。

さしました。こんどはお／はしを、おじいちゃんに、／きってもらってさしました。

おじいちゃんが、「ここ／もつんこ。」といって、^{▽▽}で／した。

ぼくは、「ちがうでいま手に／もつたら、たてるのんあた／りまえや。あんなあこわす／るやな。」と、いって、ぼく／はての上にせました。

おじいちゃんは、「そんな／んやったら、たてらへん／のに、あたりまえや。」と、／いってでした。

「りかの本のにのつとんのんらあたてつと／るで。」といいました。

おじいちゃんもつと、／しわるようにしよかと、いって、／いもを、みんなぬいて／でした。

そして、かまで、けずっ／てでした。

ぼくは、みとりました。

だいぶんほそして、いも／をさしてでした。

そして、まげよっちゃっ／たら、ポキンと、おれてま／まいました。

おじいちゃんが、だんねん／そうなかおをして、「し／もた。」と、いってでした。

こんどは、ちょっと、ぶとい／たけてしました。

すると、おとうちゃんが／きて、「しんぼうと、中を、／小そしゃん。」と、あかんと、／いってでした。

そして、小そしました。

どうせがっこうでなおす／んやさかいだんないと、思い／ました。

がっこうへ、へいきました。

よじかんめになりました。／もってきてへんこは、がっ／こうで、なんどうだいいりょう／を、してんです。

りかしつへいきました。

ぼくは、たてれへんので、／なんどうかんがえました。

ぼくは、きょうしつへい／きました。

そして、はにがねを、とって、／きました。

つくろうと、おうと、あきら、／くんのんができて、もって、／きて、／でした。

そして、いすを、うらむけにし／て、そのあしに、のしてでした。

うまくたてります。

まわしちゃたけどおちませんあ／きらくんは、にこにこでて、みんな／たの、かおを、みてでした。

ちくしょうと、思いました。

ぼくは、中にどんぐりを、いれて／、ふちは、あかつちです。

ひろいちくんも、つくってでし／た。

ぼくは、なんでたてらへんやろ／と、思いました。

そして、いもに、下をさしまし／た。

したのしんぼうがちいとしかみ／えません。

ぼくは、「わかった。」といっ／つくえを／たたきました。

として、下のとこを、みじかく／しました。

たてりました。

ぼくは、うれしくって、手の上／に、のしたりして、あそびました。

おおでいできました。

すると、おわたので、うらに、／いすをならべて、その上におい／て、おべんとうをたべました。

145の「やじろべ」は4日間にわたる工作の経過が、父・祖父との会話も交えて、細かく具体的に書き表されている。出来上った喜びの強さが、その過程も含めた、描写・表現の具体性・詳しくにつながったものといえる。

表記に多少の混乱がみられるものの、この「やじろべ」は、純一郎君の、2・3年生の間の日記(文章)を代表する1編といえることができる。

141の「学年べつりレー」は、自分がバトンタッチに失敗したこと、5番になったこと、などから、

このような、ら列的な描写に終始し、思考・感情の記述にまで到らなかったものと考えられる。

おわりに

以上の考察から、小学校低学年（2・3年を中心とした）児童の日記の文章表現力について、次のような点を指摘することができよう。

1. 題材（素材）は1年から3年まで家庭・学校・遊び等、身近な生活から取られたものが多い。
また、2年生以降、学校での学習場面を取り上げたものが増加する傾向にある。
2. 構想は、興味・関心を中心としたものが多い。ただし、取り上げる題材（素材）に対する興味・関心が乏しいばあい、ら列的なものとなる傾向がある。
3. 1年生の日記では、珍しく変わった出来事を題材（素材）として取り上げたばあい、描写がら列的になる傾向が多くみられた。2・3年生の文章では、そのような例はみられない。
4. 文字量・文数・1文あたり文字量等、いずれについても、大きな傾向・変化はみられない。
文字量については、1年生よりも2・3年の日記（文章）の方が、題材（素材）による差が小さく、安定している。
5. 片仮名表記は、2・3年生が過渡期となるためか、主に外来語に表記の混乱がみられる。
6. 拗音・促音等の誤った表記（赤ペンによる訂正は行われていない。）は、徐々に減少しているが、方言の音声をそのまま文字化する表記は、減少していない。
7. 描写力・表現力には、表現形態にそった文章形態を選ぶ、そのような発達（変化）がみられる。
また、具体的な出来事や経験に取材した日記（文章）と、思考・感情のみを取り上げた日記（文章）との間には、描写力・表現力に大きな開きがみられる。
さらに、具体的な出来事や経験に取材した日記（文章）でも、その出来事や経験に対する興味・関心が低いばあい、ら列的な描写・表現が多くみられる。
8. 1年生から3年生の間に107冊もの日記帳に計648編の文章を書いているが、その描写力・表現力は不安定なものであり、また、日記が生活の中に位置づくまでにはいたっていない。

〈注〉

- (1) 『小学校低学年児童の文章表現力について—小西純一郎君の日記を中心に(1)—』『鳥取大学教育学部研究報告 第26巻』（昭59・10・31）15頁～39頁。
- (2) 当時（純一郎君の2年生当時—昭36・4—）の家族構成は次の通りである。

ちっちゃいばあちゃん	小西はる	曾祖母	(90歳)
おじいちゃん	牧次	祖父	(63歳)
おっこいばあちゃん	久江	祖母	(60歳)
おとうちゃん	健二郎	父	(36歳)
おかあちゃん	和歌子	母	(34歳)
としこねえちゃん	淑子	姉	(13歳)
ひろこねえちゃん	裕子	姉	(10歳)
じゅんちゃん	純一郎	本人	(7歳)
しょうちゃん	祥二郎	弟	(5歳)
- (3) 1984年（昭和59年）9月21日付の私信。
- (4) 『紀要33・作文力の発達と作文教育の実態に関する研究』（昭42・1・15）広島県教育研究所。

- (5) 『国立国語研究所報告26・小学生の言語能力の発達』(昭39・10 明治図書) 国立国語研究所。
- (6) 『研究紀要第22集・作文力の研究』(昭34・3・30) 新潟県立教育研究所。

図1 題材(素材)類別

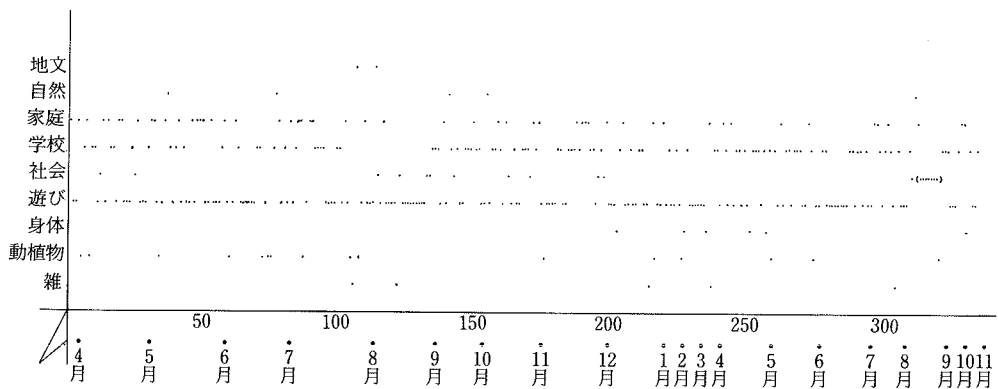


図2 1文あたりの平均文字数

$$\frac{\text{文字数}}{\text{文字}}$$

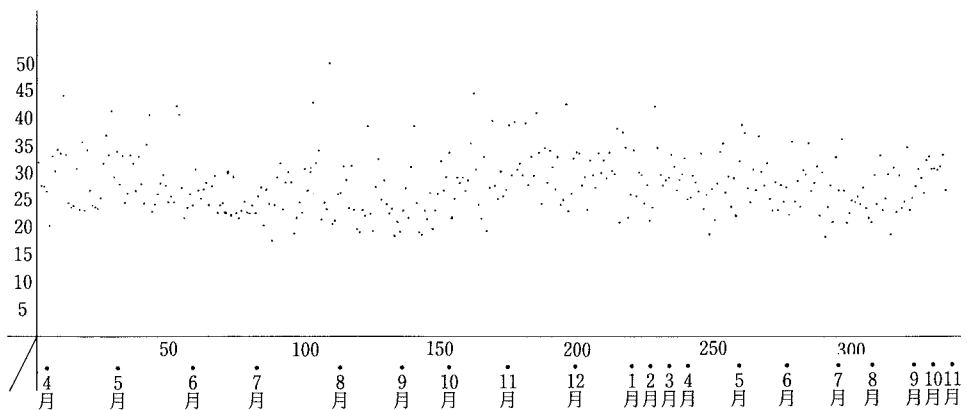


図 3 文 数

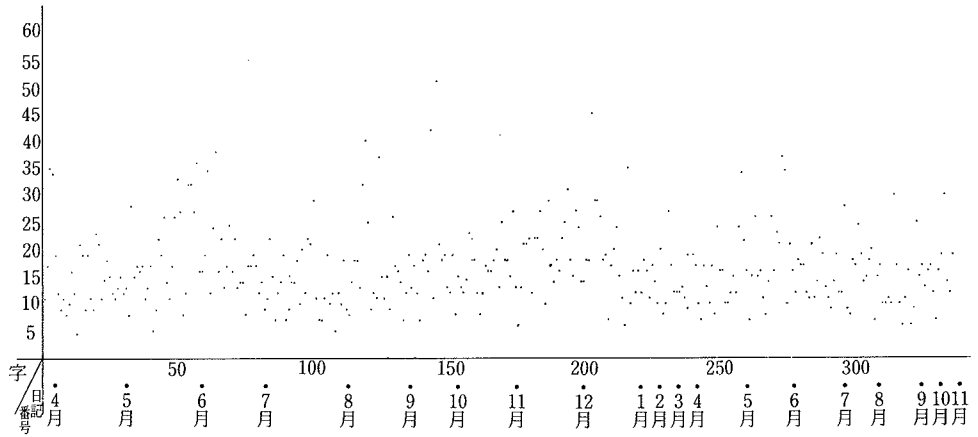


図 4 文字数

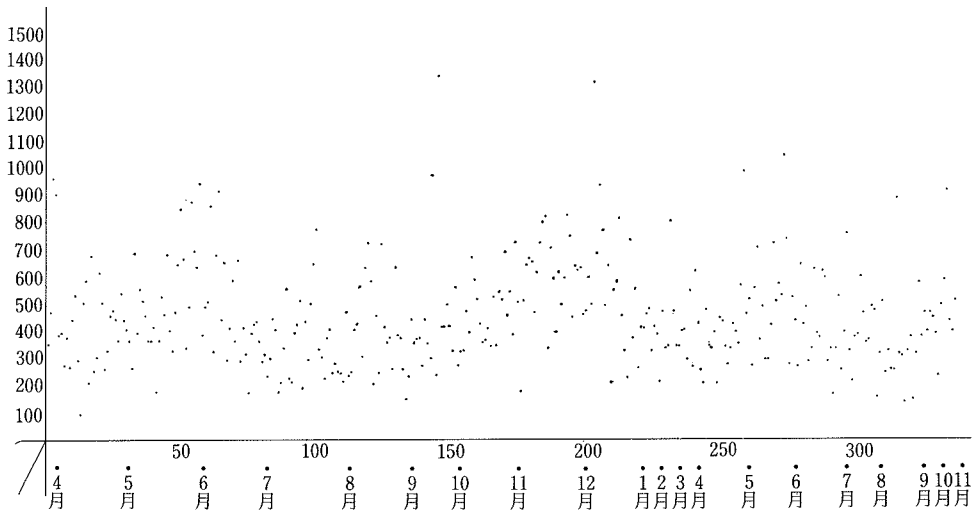


図5 会語文の比率

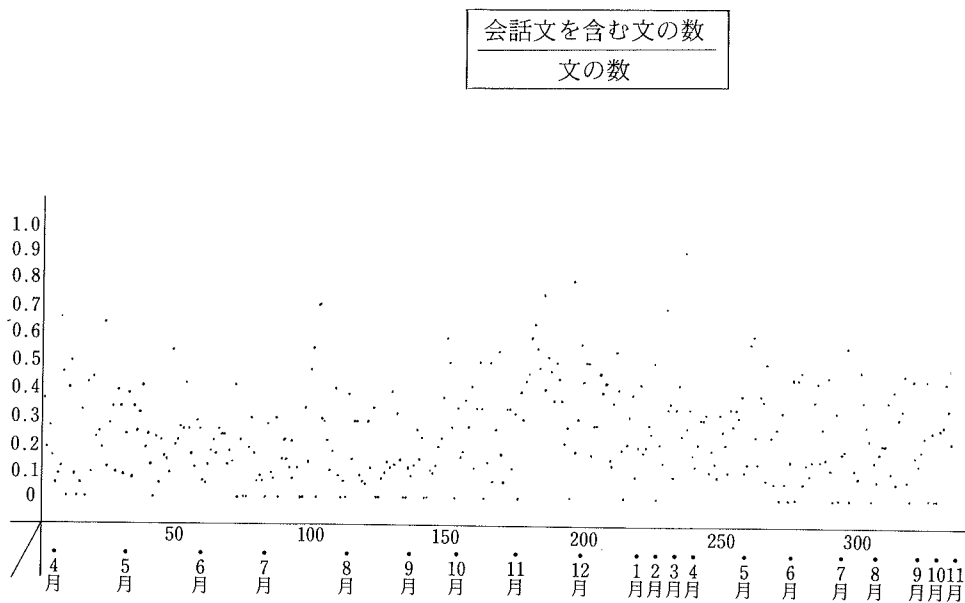
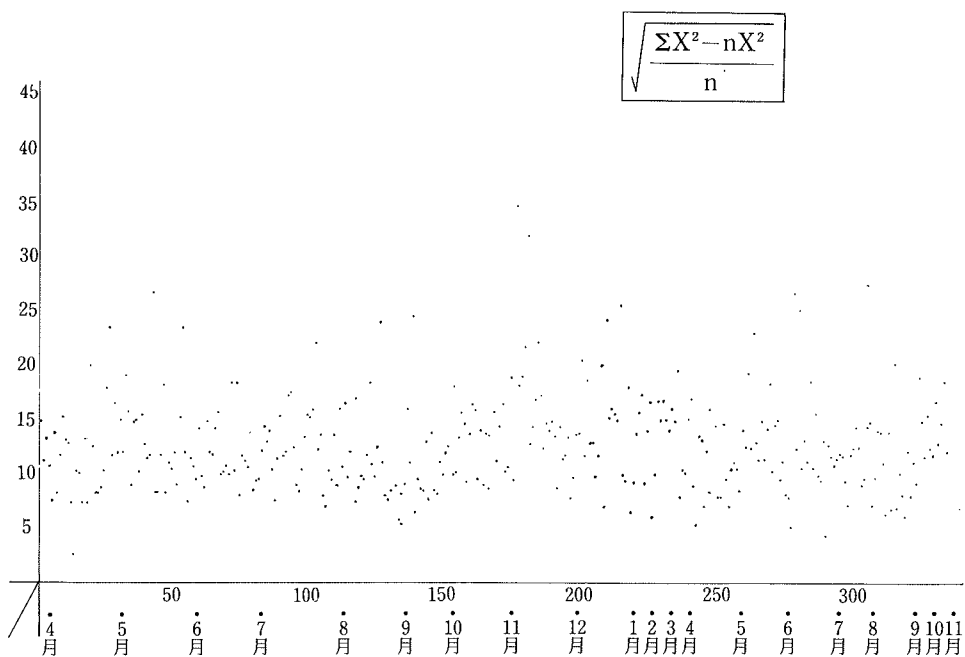


図6 1文あたりの文字数の標準偏差値



(昭和60年9月16日受理)